Ryōei Tokuoka:

A Catalogue of the Lha-sa Edition of the Bkaḥ-ḥgyur of Tibetan Tripiṭaka

片野道雄

八世紀の中頃から十七世紀にかけてインド佛教の聖典がチベットに伝訳せられた。それらチベット訳佛典を整理集成して、大蔵経として編纂せられたのは、翻訳事業がまだ終結していない十三世紀に始まり、以後何回となく行われた。従って、チベット大蔵経は幾種類もあるが、最もよく知られている版種は、ナルタン Snar thaṅ 版、デルゲ Sde dge 版、北京版の三大大蔵経である。

チベットのナルタン寺において開版されたナルタン版は日本にも比較的多く将来されているが、概して紙質が悪く印刷は不鮮明である。デルゲ版は完本として東北大学、高野山大学などに所蔵されており、大蔵経として最も校定の確かな版として定評がある。それの目録としては、一九三四年に東北大学より「東北大学蔵、西蔵大蔵経目録」が刊行せられている。また、ナルタン古版の系統を伝える北京版は清朝の隆盛な時代の勅版であることより、印刷装釘は他の版種に比して最も鮮明豪華であるが、完本としては世界に二部しか現存せず、一部はパリの国民図書館に所蔵され、一部は当大谷大学に所蔵されている。これを影印複製したものが、「影印北京版西蔵大蔵経」一六八巻(一九五八年刊、第一六五～一六八巻は総目録及び索引)である。この北京版の詳細な目録としては、既に、一九三〇年より一九三二年にわたり大谷大学より「西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録」が刊行せられており、一九〇八年、一九一五年に、P. Cordier によって Catalogue du Fonds Tibétain de la Bibliothèque Nationale (テンギュル部) が刊行せられている。さらに近年一九六五年には「西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録」の第一部(経典番号二〇〇一～二四五一)が大谷大学より刊行せられている。

ところで、ダライラマ第十三世トゥプテン・ギャムツォ Thub bstan rgya mtsho (一八七六――一九三四)は、蒙古、中国、インドなど各方面からチベット大蔵経を印刷してほしいという要請を受けた。そこで、中央チベットにはナルタン版大蔵経があったが、その版木が磨滅していて、不鮮明なところもあり、また、ナルタン版はパンチェン・ラマの管理に属していたので、ダライの中央政府でも大蔵経の版木をそなえたいという強い要望もあって、ダライラマ第十三世は一九一三年にインドから帰国してラサに落ちつき、刻経の計画を進めた。この新刻の大蔵経を他の諸版と区別するために、刻処の名を冠して便宜上ラサ Lha sa 版と呼ばれる。

開版に際して活字印刷にしてはとの意見もあったが、十三世は、大蔵経のような佛の金言を便利主義で開刻するのは殊に濁

った社会に永く佛法を伝えるために適切でないとして、ナルタン版の大きさで、従来通りの木版で開刻することになったと伝えられる。

ラサ版大蔵経の開刻は、まず、カンギュル Bkaḥ ḥgyur 部から始められ、原稿の作成には、ダライラマ御学問所の出仕デヤン・ツェンシャプ Bde dbyaṅs mtshan shabs 師と、ブリヤート蒙古の学僧チェダク Chos grags 師が任命され、ナルタン、デルゲ版など諸版を底本として原稿作成が進められた。原稿から開版されるまで、再三、十三世の校閲がなされ、いわゆるラサ版は名実ともに十三世自身の監修によって成ったものである。十年の歳月を経て、十三世の命終する前々年、カンギュル部の版刻は完成したが、生前には刊行の運びにいたらなかった。十三世が更に十年の法寿を保ったならば、続いてテンギュル Bstan ḥgyur 部も完成していたであろうといわれるが、ラサ版はついにカンギュル部のみの刊行となった。

このラサ版大蔵経はカンギュル部全百帙よりなり、最後の第百帙が目録部となっている。この目録の形式もナルタン版、デルゲ版などに準じた伝統的なものであるが、更に附録として、それらには見られない「略目録」が附加されており、経典名、巻数、章数、偈数、葉数、行数が示されている。この略目録は蔵外文献にしばしば見られる様式のものである。略目録によると、目録部を含めて全体の葉数は四八二六七葉である。

ところで、ラサ版の目録としては、一九六五年に、高崎直道編「東京大学蔵、ラサ版チベット大蔵経目録」が東京大学文学部印度哲学印度文学研究室より刊行せられた。それには、ラサ版に収録されているすべての経典名、巻数、品数、偈頌の数、葉数、行数が記されており、更に、ナルタン版、デルゲ版、北京版、チョーネ Co ne 版など諸版との比較において、ラサ版の経典が諸版のいずれに相当するか、図表形式によって示されていて、チベット文献を扱う上に、きわめて貴重なものが公開された。この貴重な業績によってわれわれは親しくラサ版の概要に触れ得るようになったのである。この高崎編「ラサ版チベット大蔵経目録」によると、ラサ版の経典数は八一〇経が数えられる。

ここに紹介する徳岡亮英編、ラサ版チベット大蔵経カンギュル目録は、カンギュル部、七八帙、経典番号三六八までの精細なカタログである。徳岡氏は、Nava Nalanda Mahāvihara に滞在中、ダライラマ第十四世より同研究所へ一九五七年にワンセット寄贈されていたラサ版を底本として、そのラサ版の目録作成に関心をよせられ、難事業にもかかわらず、ついに刊行可能なところまで進んでいたのであるが、同氏は刊行を待たずして諸般の事情より帰国されることになった。そこで同氏は印刷の校正などを、当時同研究所に留学していた九州大学の篠田正成氏に委託し、一九六八年、同研究所 Bhikkhu J. Kashyap 所長と篠田氏の協力によって本書は刊行せられた模様である。序文の日付は一九六五年となっており、高崎編のものとほぼ同年のものである。

本書は、序文三六頁、及び、経典番号三六八に至るカタログ

二二八頁よりなっており、経典名はチベット文字で掲げて、帙名、葉数、行数が附記されている。各々の経典名のもとに、第一項にはチベット訳経典名のローマナイズされたものを、第二項には、サンスクリット原典名を、第三項には著者、訳者、校訂者などを、第四項には、「東北大学蔵、西蔵大蔵経総目録」(デルゲ版)と、「大谷大学蔵、西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録」(北京版)の経典番号を、第五項には、漢訳にあるものの中国音のローマナイズされたもの、及び、南条目録の経典番号と、漢訳の日本音のローマナイズされたもの、それに大正大蔵経の経典番号を記し、第六項には、パーリ・テキストに関連するものがある場合、Pāli Text Society 刊行の経典番号を示している。また、章分けのある経典には、チベット文字及び、それのローマナイズしたものと、ローマナイズしたサンスクリットの章題を示し、各章の葉数、行数が示されている。特に、章題をサンスクリットにて示している点などはこのような目録の類では初めての試みであり、注目に値するであろう。

本書は更に、上記の各項に関して詳細なフット・ノートもあり、デルゲ版、北京版との相違点や、経典のサンスクリット原典、或は参考文献類も現段階で可能な限り注意せられていて、ラサ版の目録という範囲をこえ、チベット大蔵経の目録として内容の豊かなものである。

前述高崎編の目録と比較するに、経典名、或は章題に若干相異するところも見られるが、高崎編のものは原則としてラサ版の略目録の掲げる題名を採用していることよりして、略目録は略名で示されることが多く、徳岡編のものと若干相異が見られるのも当然かと思われる。また行数の相異も若干見られる。例えば、経典番号六の経典が徳岡編では Da 帙 509 a^6 で終るのに対して、高崎編では同葉 a^{7-}、経典番号八の経典が Pa 帙 453 a^3 で終るのに対して、高崎編では同葉 a^{7-}、経典番号十三の経典が Ca 帙 456 a^6 で終るのに対して高崎編では同葉 a^{7-}、経典番号十四の経典が Ka 帙 123 b^2 で終るのに対して、高崎編では同葉 b^{7-}、経典番号三十二の経典が Ka 帙 268 a^3 から始まるのに対して、高崎編では同葉 a^1 などが見られる。これらの相異はどちらかの目録の校正ミスと思われるが、現物をいまだ手にしえないのでいずれのミスとも言えない。経典番号二十の経典は Ka 帙 246 a^7 から始まっているのに対して、高崎編では 346 a^7 となっているが、これは高崎編の校正ミスと思われる。

先にも述べるように、ナルタン版、デルゲ版、北京版、或はチョーネ版という大蔵経とは別に、ラサ版が、テンギュル部を欠くとは言え、ともかくも新刻され、そして、既に開説した如く、諸版の大蔵経との対校を経ているのであるから、このラサ版はチベット大蔵経の現代の決定版とも言える歴史的内容のものであるといえよう。ラサ版自体がそういう歴史的意味を有するものであるだけに、それの目録である本書も、ただ単なるラサ版の目録というにとどまらず、学問的な内容豊かなものでなければならないという歴史的任務を負うているのである。その歴史的任務を充分果している点については二、三紹介した通り

である。さらに本目録を管見すると、校正にも留意せられた跡がうかがわれ、チベット大蔵経カンギュル部の目録として、既刊の「大谷大学蔵、甘殊爾勘同目録」、高崎編「ラサ版大蔵経目録」と共に、後世にまで研究者に大きな便宜を与えるものである。チベット文献を手にする者の一人として、本目録編纂者の努力に深く感謝したい。

(16.5×20cm; XXXVI+228+3 p., Nava Nalanda Mahavihara, India, 1968)